

いう項も、内容は神話それ自體、先秦寓言文學それ自體、史傳文學それ自體の説明のほかには、かんじんの小説の發生につながる問題については表面的觀察を出す、ものたりない。このあたりなどは、何の神話が何の小説の素材のひとつになった、というようなことよりも、もつと根本的な問題、小説の發想形體と神話などの發想形體とのちがいをさらにつきつめたうえで、小説らしさがそのなかから次第に分化してゆくすがたを、具體的に、かつ後篇と有機的に結びつくよう話をすすめていかないと、せつかくの「準備時期」の意義がなくなるのではないか。他日の研究成果を期待したい。

このようなところが本書の弱點であろうが、前にあげた本書の讀書指導的な性格を考えるならば、箇々の作品の解説と評價という問題に重點がおかれ、それが本書の本領であることはうなづける。それにしても、あまりにも現代の立場から古典を解釋しすぎているので、往々評價が苛酷にすぎようである。今日の社會主義建設の立場で、作品をきりきざんで、役にたつものと害になるものとをよりわけ

るのも、もちろんそれとして意義のあることだが、それよりも過去の作家たちが惡條件のなかで、どのようにして今日もなお鑑賞にたえうる（あるいはたええない）作品を書くことができたのかという點を考慮に入れて検討するほうが、將來の建設に對しても、よみみのりが多いのではなからうか。

註① 本書の author-ship は「北京大學中文系一九五五級《中國小説史稿》編輯委員會」となっているが、折りこみカードによつて改めた。

② 「中國小説史略」は本書の要所要所に引用され、魯迅の意見は客觀的事實の指摘として、動かすべからざるものとされているようだ。そして本書は、それがマルクスレーニン主義のみかたから考えた場合にも正しいのだという口調で思想的うら付けを行つてゐる。

（京都大學 橋本 堯）

ルイ・リユー、ニエム・トアン

『武則天』（佛譯）

「新唐書后妃列傳」の對譯註解附原文の寫眞版

印度支那研究會報 新集・卷三四・第二

(一九五九年季刊第二)

サイゴン 遠東印務公司 寫眞版七頁 緒言一一頁
本文一五〇頁

Une traduction juxta-linéaire commentée de la
Biographie officielle de l'Impératrice, WOU TSO-
TIEN 武則天, par NGHIEM TOAN et LOUIS
RICAUD, Extrait du Bulletin de la Société des
Études Indochinoises, NOUVELLE SÉRIE-TOME
XXXIV—No. 2 (2^e TRIMESTRE 1959)

唐の則天武后は、過去の中國に於ける興味深い人物のひとりであるが、彼女に關して、ここ五・六年間、少くとも三つ以上ヨーロッパ語による著作がなされた。ひとつは一九五五年メルボルンで出版された《C. P. Fitzgerald: The Empress Wu.》他のひとつは一九五七年ロンドンで出版された《Lin Yu-tang (林語堂): Lady Wu.》最後のひとつは、ここでもりあげたルイ・リコー、ニエム・トアン兩

書 評

教授の新唐書・后妃列傳・則天武后の翻譯である。

さて、則天武后に關して我々が強い興味と疑問とを感ずることの第一は、彼女が女性にして帝位についたという事實に對してである。日本や西歐などでならばともかく、中國に於ては、ちよつと考えられない事件である。そもそも、女性でありながら帝位につこうという考え自體が、どうして生じたかということだけを取りあげてみても、なかなか興味ある問題だと思われる。というのは我々の現代社會でもそうであるが、遠く唐代に於ても、社會通念にはずれた思いつきや行爲は、仲々生じ難いのではないかと想像されるからである。

また彼女の在位が變則的であればあるだけ、男性の場合とちがつて、かなりの抵抗が豫想できるのであるが、それを抑えてともかく立派に政治をやつてのけているし、すぐれた天子としての決定的な資格、傑出した人物を見ぬく才能を持ち、またそれらの臣下が、ただ表面だけでなく心から信服しているふしさえ見受けられることは、彼女がよく諫言を納れたことと相俟つて、單にその權謀術數や、女性

としての並はずれた欲望、行爲などの點からだけ、彼女を判斷してはならないことを物語っている。(趙翼・二十二史劄記「武后納諫知人」)

ところで、一昨年出されたこの本は、そうした彼女の正史の傳記としては、最もまとまつている新唐書后妃傳の則天武后列傳に對する、くわしい註解つきの翻譯である。本の體裁は、先ず初めに、該當する部分の原文(乾隆四年刊殿本二十四史に據る)全文の寫眞版を掲げ、本文としては、左の頁に再び原文を大きく横書きして句讀を切り、ひとつひとつの漢字の上部にその現代音を、下部にその意味を佛譯し、右の頁には、左頁の漢文の譯とその譯註とを記すというものである。

例えば、左頁に「會封泰山」と記してあれば、その各字の上部に“houei <fong> Tai-chan”と發音を記し、「會」字下に“sur ces entrefaites”(その時)、「封」字下に“nom d'une cérémonie”(儀式の名稱)、「泰山」の字下に“nom de lieu”(地名)、というふうに、ひとつひとつの字譯を載せ、右頁には、それぞれそれ等の意味をもつ文字からなる

文の譯として「その時、たまたま泰山を“fong”する儀式が起つて……」という具合に譯してある。更に註として、『“fong”封の儀式は、その完全な名稱は“fong chan”封禪であつて、泰山上及び梁甫で舉行される。その正しい意味は、祭りの煙が天に歸し得るために(その頂きに築かれる丘の助けを俟つて)山を一段と高くすることである。“chan”禪のお祭りは、地の神に感謝するため、山の麓を固めることに在る。この儀式は、過去に於て、常に皇帝固有の特權であつた。シャヴァンヌ「泰山」參照。云々(以下封禪とその史實について、ウィーゲル「歴史初歩」からの長い引用が續く)』と記すように、大變丁寧な、またそれだけに非常な勞作である。

元來新唐書の文章は、リコー教授も緒言で言及されているように、簡潔であると共に難解であつて、舊唐書や資治通鑑と對照してはじめて意味のはつきりする個所が少くない。(因みに、曾公亮の進新唐書表にも「其事則増於前、其文則省於舊」とある。)例えばこの武后の傳でも、「國俊等亦相踵而死、皆見有物爲厲云」の條りなど、後半の意味がわかり

にくいのであるが、舊唐書の萬國俊傳を見ると、「皆見鬼物爲祟」となつていて、どうやらそんな意味らしいことが判るのである（翻譯では、「死に當つて、皆んな、彼等の實物の出現を化物か幽霊（彼等の犠牲者の亡魂）のように思つた、と言つた。」となつてゐる。）

そうした點から見ても、この兩教授の翻譯は、厄介な文章の譯として、武后に關心を持つものや、今後持とうとするものにとつて、注目に値するものと言える。その譯文は、どちらかと言へば意譯的であり、またそれは通鑑や舊唐書などと對照され、苦心して譯されたものだけに、おおむね妥當であるが、ときには疑問に思われる個所もあるのである（前出の譯もその一）、氣づいたところを以下に述べてみたい。

そのひとつは、三二頁から三四頁にかけて、「故昭儀伺后所簿，必欸結之。得賜予，盡以分遺。由是后及妃所爲必得得軌以聞。」とあるうち「得得」を「得得として（全く特別に）の意」と讀まれ、從つて「聞」を「宮女が通知しに來る」意にとられているのは、「后及び妃の爲すところ必ず得、得れば軌以て聞ゆ」の意にとられるべきではな

からうか。そうすれば「聞」の主語もおのずから「昭儀」となる。

また、四四頁の「命羣臣及四夷酋長朝后肅義門内。外命婦入謁朝皇后自此始。」であるが、これは「肅義門」で點を切り、「内外の命婦入りて云々」となるのではないかと思われる。

また、五二頁「及儀見誅，則政歸房帷，」を「人々は、斬罪された儀を見るに至つて、云々」と譯され、「見」を見る意にとられているが、ここの「見」は受身の助字であろうし、七二頁「后内幸帝，殆得自專？」（譯：皇后が彼等の傍にいては、どうして皇帝が、彼自身獨力でことを行い得ようか？）とあるのは、「后内幸帝，殆得自專」（后、内に、帝^{あやう}殆くして、自ずから専らにし得るを幸いとす。」と讀むべきだろうし、九四頁「乃治銅匱，爲一室署。東曰：《延恩》……」（譯：それから彼女は、銅の投票函を鑄造し、それを一室に設置して使用に充てた。函の東は《恩惠の給附》と名づけられた。）は、「乃ち銅匱を治て一室を爲り、東に署して延恩と曰う」、一二二頁「合祭天地，五方帝，百神從。以高祖，太宗，高宗，配引魏王

士獲從配。」（譯：同時に人は、天と地のために、ついで五つの方位の最高神達のために、終りに百神のために祭つた。それから専ら灌奠の儀式が、唐朝の創始者高祖の靈のため、ついで太宗と高宗のため、その直ぐあとで（皇后の父）魏王士獲のために捧げられた。）は、「天地、五方の帝を合祭し、百神を従す。高祖、太宗、高宗を以て配し、魏王士獲を引きて從配す。」ではないかと思われる。つぎに、一一六頁「以周漢爲二王、後虞、夏、殷、後爲三恪。」（譯：彼女は、周と漢とを二つの君主とみなし、ついで虞、夏、殷を三つの尊敬すべきものとした。）は、「周、漢を以て二王の後と爲し、虞、夏、殷の後を三恪と爲す。」、一二八頁「至日祀上帝；萬象神宮以始祖、及考妣配；以百神從祀。」（譯：上帝を祭る儀式の日になると、萬象神宮に、彼女は至高の天のあとで、周の始祖に對する灌奠の儀式を直接に設置し、ついで自身の父母に對する灌奠の儀式をしつらえ、それから専ら百神に對する灌奠の儀式がなされた。）は、「至日（冬至の日）に上帝を萬象神宮に祀り、始祖及び考妣を以て配し、百神を以て從配す」の如く讀むべきではなからうか。

以上は、二、三の氣づいた點であるが、勿論これらの占める部分は些少であつて、兩教授の成果をそこなうものはなからう。

むしろ我々は、例えば「世將種能合亡命若徐敬業乎？」（九〇頁）の如く、一讀しただけでは意味の判りにくい個所を、「傳統の中で、高められ、教育された家柄による將軍達で、命を賭けようとする人々を再び集める能力のあるもの、徐敬業のごときものが、諸君の中にひとりでもいるか？」というふうに、わかり易く譯された成果と勞とを、ヨーロッパの一般讀者とともに多とすべきであらう。

（紫野高校 都留春雄）

嚴敦易「元劇斟疑」

北京 中華書局 一九六〇年五月 七六〇頁

元の雜劇に關する疑問は、決してすくなくない。正統の文學作品の場合に比べて、脚本の傳承が鄭重でなかつたことも、原因の一つであらうが、個々の作品について作者や